

それから



後編

第十四章 ギター教室

季節はすっかり秋らしくなって朝晩は寒いくらいになっていた。

龍のマンシヨンのメールボックスの中に、「ギター弾き語り教室」というチラシが入っていた。黄色の紙には先生のプロフィール、予約の時間、月謝など募集内容が詳しく書かれてあった。

「弾き語り」…ギターを弾きながら歌を歌う。最近このスタイルが自分に一番ぴったりだと思っていた矢先、タイミングよく入ってきたこのチラシは少し運命的なものを感じた。そして、偶然はまだあった。あの高田さんの奥さんからも「ギターの先生でこういう人がいるんだけど、通ってみない？ 私も友達と練習をしているんだけど、目からウロコだよ」とこの間の夏祭りの時に立ち話をしながら誘われていたのだ。

今まで自己流でやってきたギター演奏。誰からも教わることはなかった龍は自分には基本がないとずっと思っていた。バンドをやっているもリズムがよく分からなくて、ストロークの刻み方や強弱の付け方など自己流であった。よくやれてたなあ〜と思うほどであったがきつと違和感はあったはずだ。

今年の夏でバンドも解散したことだし少し基本的な弾き方を勉強してみようかなと思っていた。そして、アコースティックギターでフォークがやりたいとも思っていた。エレキ、ベンチヤーズももちろん大好きだが、これからはフォークをやろうが龍の考えであった。

龍は勇気を出してチーフシのギターの先生に電話を試みた。

「平井と言いますけど、高田さんから…」

「はい、笹岡です。高田さんに聞いてました。見学いいですよ。ちよつと高田さんの練習日にきたらどうですか?」という先生の誘いに龍は心を決めた。

次の週の日曜の十一時からが高田さんの練習日だった。先生の自宅に伺うと、高田さんはもう一人の友達と練習にきていた。

「平井さんはもう完成してるのかも知れないけど、いろいろ教えて貰えて勉強になるよ」と高田さんはリラックスした雰囲気ですぐにギターを練習していた。

「とんでもない。ギターは自己流だから、分からないことばかりだから…」

笹岡という先生は優しくそうながめかけた、素敵な声の持ち主であった。

「昔は教則本もなかったから、みんな独学でしたよね」

「私も、いろんな人から技術を教えてもらった」

高田さんたちの練習風景はとてもなごやかで感じが良かった。

優しいしゃべり方と素敵な声の先生はプロのミュージシャンで龍よりは少し若い人だった。

高田さんたちの練習を最後まで見て、龍はお世話になろうと決めた。

「お願いします〜」ということで早速練習日の予約をとった。次の週の土曜の夜七時から八時が龍の時間となった。

予約の日、ドキドキしながら先生の自宅にお邪魔した。夜の練習部屋はこの間の雰囲気と違っていたし二人きりというプレッシャーもあった。

「こんにちは〜 平井です」

「どうぞ。」

「お〜、オベーションですね」

「は〜い。安物ですが、一応…」

「私もオベーションです。古いですがずっと愛用してます」

さすがに、龍のギターとは比べものにならないくらい高そうで、音の響きがまるで違っていた。

先生はギターの部位の呼び方から入った。

「応説明しましたが、平井さんは初心者じゃないので、さっそくやりますか〜。何からやりますかね〜」
「いままでどんな曲をやってました？」

「フォーク、ニューミュージック系が好きです。」

「そうですね。やつぱりね。平井さんはそんな雰囲気ですよね。」と優しい目で笑った。

「平井さん、スリーフィンガーはやれますか？」

「いや、得意じゃないです」と言いながら、龍はまるでやったことがないのが本当のところであった。

「それじゃ、コードの押さえ方とかは省略して、その辺りから練習していきますか」

さうそう、楽譜を取り出したのが、風の「二十才の別れ」だった。

「これどうですか？ スリーフィンガーを覚えるとはっちゃん曲だから」

「え〜と…コードは…Emでしたね」と笹岡先生はギターを弾きだした。

うま〜い…龍にはいままで経験したことのない指の使い方と心地よい音の響きであった。

「え〜と、じゃゆっくりと二緒にやりますか。」

「親指を三弦、中指を六弦を同時に弾いて…」とゆっくり説明をしてくれた。

なるほど、いい和音が気持ちが良い。

しかし、なかなか龍の指は動かない。龍は先生の後に見習いをしながら続いた。

「これがスリーフィンガーなんだ〜」

「これができるって、こんなのもやれますよ」と続けさまに何曲か先生が弾いた。

「ギターの方は、家で自己練習してもらって、歌もいれますか」

「はい。」

さっき練習したイントロを一緒に弾き出す。

リードギターのパートを弾きたくなったが、さほど自信があるわけでもなかったので龍はやめた。

あゝあなたに、さようなら 言えるのは 今日だけ

先生と一緒に龍も歌った。

「平井さん、いい声だね」

先生が誉めた。

「弾き語りは歌が命ですから…。ギターはポロンポロンでもいいんですよ」

「平井さんの声は財産だよ」

と、二度も誉められました。

練習第二日目から、龍はすっかり気持ちよくさせてもらった。

第十五章 オーディション

ギター教室通いはひと月に二回のペースで始まった。

吉田会長から久しぶりに電話が来たのは十月の後半であった。

「平井さん、ご無沙汰です。実は今年の町内会の総務部長をやってもらってる福本さんという人がいるんだけどね…」

「ああ、顔だけは知ってるけど…」

「この間、町内会の集まりの時に話したら、バンドで歌いたいっていう話になって…」

「へえ。そうなんですか。バンドって、king of kings のじゃ…」

「うーん。あんな形で終わっただけ、八巻さんも山崎さんも続けたいと言ってたしね…」

「そっかあ…」

「安東さんの代わりにどうかと思って…」

「うーん。揃えた楽器と機材はもったいないとは思ってたんだけどね」

「バンド復活ですか。ただ、女性ボーカルとなると曲目が全然変わるからね」

「私はいま、弾き語りの練習で教室に通ってるんですよ」

「やるとしたら、個人的にはそっちかな」と思っていたところでした。

「そつなんだ。一回会って欲しいんだけど…」

「う〜ん、まあいいですよ。それなら今週の日曜日にギター持っていくので、ボーカルのアンプ運んでもらいますか?」

「あと、メンバーの人は、来れる人だけ…という感じで」

king of kingsは解散ということにはしていた。ただ、せっかく揃えた楽器と機材がこのままでは…と龍も考えていた。龍がメインボーカルをするということも考えられたが、king of kingsの選曲をそのままスライドするという訳にはいかなかった。というか、自分のイメージではないと思っていた。あの選曲はあくまでも安東さん用で龍はバックコーラスでハモるという設定だった。

女性ボーカルつか〜。吉田さんがまた誘ったんだろうな〜。今年の総務部長だからゆかちゃんから引き継いだことになる。また吉田ファミリーに引っ張り込みたいのかな?と思うた。

日曜日、四時から一時間だけ市民センターの会議室を借りた。

「こんにちは〜」龍が会議室に入っていくと、ゆかちゃんを除くメンバーがセッティングを終わっているとこだった。

「ご無沙汰〜です。」夏祭り以来の顔あわせだった。

「よろしくお願いします」福本さんはかなり緊張の様子だった。

「今日はオーディションらしいですから…」龍が言っと

「えっ、そうなんですか」と笑顔がなくなっていました。

「えっと、何をやりますか？」

「ジャンルは？」

「リクエストはありますか？」

龍は楽譜からなにかいいのにな〜と探しながら、福本さんに問いかけていた。

「そっだ、これ歌えますか？」

「なごり雪」

「はい。好きな歌です」

ギター教室で先生にもらった楽譜の中にあつた。弾き語り用で先生と二、三回練習したので、龍もすぐに伴奏ができた。

「汽車を待つきみは〜 時計をみつめてる〜 季節はずれの雪が降ってる〜」

福本さんは少し緊張のせいで声がつわづてはいたが、歌い慣れをしている感じだった。それにギターの伴奏にすぐ歌える感性はきつと前に音楽をやってる人かな？と龍は思った。

「前、他のバンドで歌ってたんですか？」

「いえ、初めてです。高校時代にブラスバンド部で、打楽器だったんですけど」
「それでか。」

八巻さんも山崎さんも「」しながら、うまいですね」と誉めていた。

「じゃ、あとメンバーと相談してからということでもいいですか？」

「練習は日曜日の午後が多いんですが大丈夫なのかな？」

「はい。主婦ですけど、時間は合わせられますので…」

「はい。じゃそいついつとで、今日はご苦労様でした」

「よろしくお願いします。」

やつぱりオーディションみたいになってしまった。

大したバンドでもないのに…と龍は苦笑いをしていた。

第十六章 新しい出会い

ギター教室に何回か通つてゐるうちに先生とは音楽以外の話しが弾んで、練習時間がずれてしまつことがしばしばあつた。

「平井さんとは、つい話しが長くなつてしまつてすいませんね〜」

「いや〜、私がべらべら話してしまつんで〜」

「今日は、三〇分遅くなつても大丈夫ですか?」

とこんな調子のギター教室であつた。

気心が分かつてきたころ、先生が

「ねえ平井さん、ウチに来てゐる人で石川さんという生徒さんがいるんですが、平井さんと一緒にやったらいいんじゃないかなと思つただけだね。どうですか?」

「えっ、バンドですか?」

「おおげさな形でなくても、二人でやるとまた音が広がるしね。」

「どついつ方ですか?」

「昔、カレッジフォークをやつて。ギターはうまいですわ」

「カレッジフォーク?というと、あまりメジャーな曲は…」

龍はよく分からなかつた。

「う〜ん、いまはサイモンとガーファンクルなんか練習してるから、曲幅は広いと思うよ」

「サイモンとガーファンクル… かなりギターうまさってすね」

「まあ一度連絡取り合って、お互い気に入れば…かな。」

男性デュオグループも面白いかな…でも人だよなあ〜と思いながら一応先生からの提案ということもあつたので後日電話を試してみた。

「平井といいます。笹岡先生から紹介してもらって…」

「あ、どうも〜 石川です〜。先生に聞いてました〜。」

「歌がものすごくうまいって〜、先生が誉めてました〜」

「えっ そんなことはないんです。石川さんもサイモンとガーファンクルやってるとか」

「私の技術で満足しますかね〜。そこが心配で。」と龍はギターは自信がないことを告げた。

「いやいやとんでもないですよ〜」

「じゃ、今度合わせてみますか」

「はい、やります。」

「我が家でもいいですか〜。田中はだれもいないので…」と石川さんが提案してきた。

「はい。いづですよ」

ということ、音あわせの約束をして石川さんの自宅を訪ねることになった。

教えてもらった住所を手掛かりに行ってみるとすぐに分かった。玄関で迎えてくれたのは大きな犬だった。龍の顔を見た途端吠えてはいたが尻尾を振って歓迎ムードではあった。

家の中にお邪魔すると部屋にはギターがおかれていて、すぐにでも練習ができる状態になっていた。

「平井ですよ」

「石川ですよ」

小柄で真面目そうな人なつこい顔をしていた。

部屋には少年野球の優勝した記念写真が何枚か飾ってあって、石川さんは「これは息子で、私はコーチで…」と自慢げに話した。息子さんは今は関東の大学に行って、家内もパートで、休日は私はいつも犬と留守番ですよ。と自己紹介をしてくれた。

「ところで、石川さんはどんな曲をやっているんですか？」

「はい、学生の頃にカレッジフォークのグループに入ってた」

何曲かギターを弾きながら口ずさんだが、龍は知らない曲ばかりだった。

「平井さんは…？」

龍は、今までのバンドの話しや夕陽が丘の夏祭りの話を自己紹介かたがた話しをした。

「すごいですね。」と夏祭りの企画の話をするに驚いていた。

「じゃ、なんかやってみますか？」

石川さんが「おはなし」っていい歌があるんです。といいながらCDを流して聞いてみた。

メロディーだけは龍も知っていたので「それやってみましょう」ということになった。

もちろん、石川さんに楽譜もあったのでさっそく龍は石川さんのギターと歌に合わせていった。

「う〜ん、なかなか良い曲だね〜」

その後も加山雄三の「旅人」やフォークを中心にどんどん歌ってみた。

「いけそうですね〜」と龍はいったものの、さて、どんな場所で歌っていったらいいのだろうと思った。

石川さんは歌の方は声がまだ出てなくて、というより自宅でひとりだからあまり歌う機会がないのだろうと思った。高い音を苦しそくに歌った。「先生にも歌い方はいつも注意されてるんですよ」と頭をかいていた。

こんな訪問練習が、時間のある日曜日の度に続いたが、「石川さん、一度私達のバンドの練習に来てみないですか？」と誘ってみた。

いつまでも自宅でふたりつきりで練習をしても、前に進まない気がしたからだ。

第十七章 子供バンドの話し

バンドの方は福本さんを入れて再結成をしようということになった。龍は戸惑いもあつたが結局またやることに決めた。

そして選曲を龍は考えていた。とにかく地元夏祭りでウケそうな曲。福本さんの声を活かせて、バックで演奏しやすく、そしてリズム感のあるような……なかなか難しい。

龍が提案したのは、高橋真梨子「桃色吐息」「ジョーへの伝言」「五番街のマリー」「古い歌で「涙の太陽」ピンキフの「恋の季節」だった。織田さんがサザンの「そんなヒロシにだまされて」は……どうですか」で即決定。福本さんのリクエストで「ハナミズキ」も即決定した。

やはり龍の選曲は古すぎたかもしれないが、それなりにウケる自信はあつた。

今度の夏祭りを目標にして本格的に練習が始まつたのは、年が明けてからだった。

一方、新しいバンドの結成をあきらめていた龍はアコースティックバンドを石川さんとやる方向で進んでいた。

「いま、アコギで、別の人とデュオを組んで練習しているんだけど、織田さん、一緒にやる気ない？」と龍は織田さんを誘ってみた。

「えっ、私でいいんですか?」突然の話しに織田さんはびくりした様子だった。

「古いフォークが中心になるので…それがいやでなければ…。だけど…。織田さん結構古いの知ってるし…どうかな?と思うてね」

「はい。私じゃちゃんっ子で、そのせいか昔の歌は好きなんです」

「そうなんだ。フォークは嫌いかと思ってたんだ」

「いいえ。好きです。安いア」ギもってます」

と織田さんは目を輝かした。

「じゃ、今度、石川さんっていうんだけど、紹介するから…」

話しはトントン拍子に決まった。

龍は織田さんの声に興味があった。ハモルなら織田さんの声がいいかも…と少し計算したのだ。

春になると、龍の身边には音楽の話しが色々と持ち込まれてきた。

市民センターの事務所で相変わらず「コーヒー」をご馳走になっていると

「平井さん、実は地域の住民の方々と市民センターが共同で事業をしないという市からの要請があっ

て、ここもなにか考えなきゃならないのだけれど、いい案はないですかね〜?」

センターの所長が相談してきた。

「う〜ん、音楽絡みならね〜…」 龍は「コーヒー」をすりながら、ちよつと考えてみた。

「え〜、音楽でもいいですよ」 所長は期待したのか目を輝かせて身を乗り出してきた。

「以前、小学校の先生から学校に子どもたちのバンドクラブがあるのだけれど発表の場がなくて〜。夏祭りにでられるようにして欲しい〜…」という相談があつてね。」

「当時やつたバンドのメンバーにも小学生の先生がいたので協力してもらつて、出演したことがあつたんですよ。去年はそういう話しもなかったので小学生は出なかったんですが…」

龍は話しを続けた。

「それでね、いまふつと思いついたんですけど、こちらから小学校の子どもたちにバンドをやつて夏祭りに参加しませんかって募集するとか…」

「お〜、それいいですね。現実的にできますか?」

「う〜ん、楽器と機材だよな。それと指導者かあ〜」

「ウチのメンバーに先生をやつてもらつてかあ〜」

「……。みんななんていうかなあ〜」

「前向きに考えてみてくだやう。」

「まあ、う〜ん、あ〜」

思いつきで話した龍のバンド募集の話に市民センターは大いに乗り気になった。しかし、夏祭りに練習をしている今のバンドにそれだけの余裕があるかどうか？かなり不安であった。失敗したかなと龍は後悔した。

バンドの練習日に龍はみんなに相談をした。「実は小学生に音楽を教えてバンドを作ろうという市民センター主催の企画があるんだけど、先生役をやってもうえない？予定は秋の文化祭なんだけど。」

龍はさすがに今度の夏祭りに出演とは言えなかった。

「えー、」という顔をしただけで、だれも良いとも悪いとも言わなかった。というより、何をいいだすの？という感じだった。

「楽器を貸してあげて、先生になってもらって…無理だよなあ」言い出しつべの龍自身もこれには自信がなかった。断るしかないと半分諦めていた。

「まあ、一応そんな話もあるということ…」龍は市民センターには断ろうと、それ以上の話しはやめた。

「ひさしぶりー。元氣してたー？」

こんな時に高田さんの奥さんにはったり会つとは…。

まるでドラマの筋書きのような話しが展開したのだ。

「こんにちは。 ギターの練習もなかなか進まなくて」

「平井さんはその後どうなの？」

「うーん、また町内会のバンドが復活してね。 忙しくしてたよ」

「そっだ、実は子どもたちのバンドを作ろうという市民センターの企画があつてね。」となにげにあの話をしてみた。

「えー、ちよつとそれ詳しく教えてくれるー」

龍が説明すると

「それ、私やるー」と高田さんの目が輝きだしたのだ。

「私、この間まで郊外の小学校で、まさしくそれを二年間やったのよ。臨時勤務講師とかなんとかで…」

「えー、それってどう話しなのー」

龍もあまりにも偶然な話に興奮していた。 こんなことであるのだ。

高田さんは、子どもたちに楽譜の読み方と楽器の演奏を教えて、最終的にバンドを作ったのだそっだ。学校からの依頼で一年かけてクラス30名くらいの子どもたちだったそっだ。

第十八章 龍はパニック

龍は市民センターに小学生バンドの件で少し可能性が出てきたことを話した。

市民センター側の意向を確認しないで進める訳にもいかなかったし、もう少し詳しく聞いておこうと思った。

「おう、やれそうですね！」所長は目を輝かせて、段取りを説明しだした。

「え〜と、お役所なもんだから…」と前置きをしながら

「まず企画書を作成して、それを市に提出をして、市で審議して認可が降りれば…簡単にいうとそんな手順なんですよ」

「分かりました。こっちはとりあえずみんなの確認をしておきますから」と龍は答えた。

「はい、お願いします」と所長は頭を下げた。

「雀の涙ほどの補助金も市からですので…お茶菓子を買えるくらいですけど…」事務の佐藤さんが付け加えた。

「それに、企画書を書くときも相談に乗って欲しいんですけど…何から何までいいません」と二杯目の「ヒー」を出しながらお願いされた。

「今度、平井さんの机を用意しておきますから…」と所長は冗談を飛ばして二歩前進したことにはっとした様子であった。

龍はバンドの練習日に子どもバンドの話をした。

高田さんの話し、市民センターの話し、龍の考えてることを話して、とりあえずメンバーに了承を得ていた。ただ、募集しても子ども達が集まるかどうか分からないので…という話ではあつた。みんなの反応はイマイチで「それどころじゃない」が本音だったと思う。

一番賛成してくれたのは、最近練習に顔をだしている石川さんだった。

「私も地域の子ども達に少年野球のコーチしたことがあるんですが…いいことですよ〜ね」とひとり大きくうなずいていた。

石川さんのそんなひょうひょうとした話し方と、テンポの微妙にずれる言動と行動が龍は癒されていた。ピリピリしないところが石川さんのいいところだ。

龍は新しいバンドの名前を考えていた。

「そろそろバンドの名前を考えないとね〜。なんかいいのない?」

反応がないので龍が言い出した。

「JーV A」はどうか?」

「え〜 ジジババですか?」とみんな齊に眉をしかめた。

「いや、地場ですよ。地元で採れたバンドだから…。ちよつと意味もあつてユーモアもあつて、どうか?」

龍は半分冗談のつもりで考えた名前だったが、いつのまにか「J・V・A」がバンド名で通ってしまった。もと恰好の良いバンド名もあつたんだろうが…。他の誰からも意見はなかった。

二月から四月にかけて「J・V・A」の練習は隔週くらいになった。途中からゆかちゃんもキーボードで復帰して女性二人になった。相変わらずハキハキして山崎さんのキーボードの弾き方にビビシとはづばをかけた。「King of Kings」から「J・V・A」へと町内会バンドは変じた。

そして、龍は石川さんと織田さんの三人でアコースティックバンドも同時に結成した。織田さんの提案で「Back Number」という素敵なバンド名で練習を開始。夏祭りを目指すことにした。

選曲には三人でたづむりと時間をとった。町内会バンドは龍が案を出して、それから削るかプラスするかの方法で曲を決めていったが、「Back Number」はそうはいかない。それぞれ個性があつたのでそれぞれに出してもらった。曲数は何曲もできたが、時間との勝負だった。夏祭りまでの時間はわずかだし、他にやることが山積していた。どうでううやって時間を作つたらいいか…。

龍は綿密な時間配分の計画を練ったがそれはかなり強硬なスケジュールだった。

五月の初めには、追い打ちをかけるように市民センターから「子供バンド」の企画が正式に決まったと連

絡があった。

早速小学生のバンド募集も始まった。市民センターから小学校への直接のPRもあり、期待していなかったが十一名の予想を反する多すぎるくらいの子ども達が応募してきた。

「平井さん。ちよつと多すぎるよね」と市民センターの心配通り、この人数をバンドとしてやるにはかなり難しいかもしれない。龍は少し弱気にはなっていたが、高田さんの自信溢れたパワーはものすごいものがあった。

「大丈夫。心配しないで。ちゃんとやれるから…」高田さんのその言葉だけが龍の頼りであった。

初めての子ども達を集めた会合が市民センターの会議室であった。最終的に集まった子ども達は、小学四年生から六年生まで男の子二人、女の子六人の八名だった。予定より三人減った。少し安堵した。

「さて、それでは自己紹介も終わつたし、やりたい曲を決めようか。どんなのいいかなあ」と龍は司会を務めながら子ども達と会議をすすめた。

いろいろ候補曲が出たがその中にスピッツの「チェリー」があつて、大人も子ども達も全員一致でそれに決定したのだった。いい選曲が出来たと思った。

さて、その後どうやって進めていくのかが大きな問題だった。まずは練習場所は市民センターが体育館を

当然のことだが無料提供。楽器はエレキギターを龍と織田さんが提供。ベースギターを八巻さんが、ドラムは吉田さんのドラム、キーボードは山崎さんとゆかちゃんがそれぞれ提供してくれた。

そして、教え方とスケジュールに関しては高田さんと打合せをした結果、まずパート毎に別れて楽譜にそつて忠実に指導していき、後半、合同練習で合わせるということにした。

各週の午後三時から五時まで体育館が空いている会議室を練習場所にした。

教える大人たちは、高田さんはドラムを担当、あとはJ・V・Aのメンバーがそれぞれのパートを担当することにした。

第十九章 取材

龍はめちやくちや忙しかった。とにかく夏祭りに向かって土日のは全て音楽で埋まってしまうた。それも二つのバンド練習と子供バンドの練習、そして、夏祭り実行委員会の会議とそれに関わる人達との打合せにも時間をとられた。

龍のスケジュール表は、七月末の夏祭りに向かって予定が溢れていた。

そんな時に思わぬお客がきた。河北新報社の記者だ。

「地域の『ミニテーション』ということで地域性のあるホームページの特集記事の取材依頼だった。市民センターからの紹介だった。龍の作っている『ミニティレストラン』というホームページのことがタ刊に載ることになったのだ。

その取材の時に、龍はその記者にこの地域の音楽活動の話をしたのだ。夏祭りの音楽祭のことや、そして、現在やっている『子供バンド』の話に記者はすごく興味をもったみたいだった。

「平井さん、その子供たちと大人の交流はいいですね。それもバンドを作って一つの曲にチャレンジしているっていうのはいいですよ。ぜひまた取材させてください」

「はあ、ぜひどうぞ。子ども達も励みになりますから」

と、後日その記者は練習場にくる約束をして帰っていった。

子供バンドの練習がいよいよ始まった。

大人たちと子どもたちの音楽活動…。新聞記者が興味を持つのも理解できる。地域の中だけで市民活動として始まる音楽。さて、どんな結末を迎えるのか龍にとっても当事者ながらとても楽しみな始まりであった。

「子供たちには、大人に教えてもらうんだということ指導していきたい。遊びではなくて授業だと思ってください。それにはまず、挨拶からきちつとしましょう…」高田さんの臨時講師の経験から言い出したことだった。

「はい、それでは一列に並んで…」

「はい、六年生のあなた、代表であいさつしなさい」

急に指名されて何をいったらいいのか分からなかったみたいだったが

「よろしくお願いします～」と恥ずかしそつに小さな声で大柄な女の子が緊張しながら挨拶した。

「はい、もっと大きな声でね～」と高田さんが注意した。

きちつとけじめをつけてやらないとダラダラして前に進まない。ただ暇潰しのようによつてみようという考えがあると、この企画は途中で終わってしまうから大人の私たちもそのあたりをきちつと指導してあげないといけないですよ。と高田さんは打合せの時にも熱弁した。たしかにお遊びではとても続きそうもない事業であることを肝に銘じた龍だった。

「はい。よろしくお願いします。今日の予定は〇〇です。…」

「はい。ご苦勞様でした。今日は〇〇でした。次の予定は〇〇です。都合の悪い人はセンターに必ず連絡を入れるようにしてください」という様な話を龍は毎回挨拶した。

そして、大人達のミーティングを毎回欠かさなかった。

子供バンドは、結局八名になった。

男の子二名、女の子六名でキーボード二名、ギター一名、ベースギター一名、ドラム一名、ボーカル二名の編成になった。男の子にはドラムとベースを担当することになり、他のそれぞれのパートもすんなりと決まった。

高田さんがまず初めにやったのはパート毎の楽譜作りだった。

それぞれのパートにわかれて、自分のパートのところの楽譜を台紙に貼っていく作業を子ども達にやらせた。バラバラにされた楽譜をみながらパート毎に練習をしていくのだ。

さすがだと感心した。子どもたちは切り貼り遊びでもしているかのように楽しそうにやり始めた。大人ならそれなりの本を買ってきてすぐに練習をしますのだからうけど、こども心をぎゅっとつかんだ楽譜作りだった。一項目はこれだけで終わった。

子ども達の中では、楽器の経験者はキーボードの二人だけで、ギター、ベース、ドラムはみんな初体験で

ある。その子ども達にギターはドレミからコードの押さえ方、ストロークの仕方までを教えるのだから大変な作業である。ベースギターも重いギターを持つだけでも大変なのに、小さい手で太い弦を押さえるのは大変なことだ。そして、ドラム…。高田さんがつきつきりで男の子に教えた。

さすがに、ボーカルとキーボードの進み方は早かった。しかしボーカルは低学年の子の声が小さくて担当の福本さんは発声から教え込んでいた。キーボードは経験者だけあつて楽譜通りにすぐに弾き出していた。

さて、ギターは織田さんと石川さんが主に教えた。コードのストロークだけなら簡単なのだが、単音のオタマジャクシが小節にポツポツと出てきたり、アルペジオが出てきたりで難解だった。メロディーがないと難しい。「いやあくオレにもできねえ」と織田さんは頭を抱えていた。ベースギターは八巻さんが丁寧に教えていたが小さい体で重いベースギターを持つことが一番大変そうだった。ドラムも高田さんが教えたがきつと何がなんだか分からないまま、身体の動きで覚えていったのだと思う。

しかし、何週間目からだんだんと不協和音の声がではじめた。なかなか進まない地味な練習が続いて子ども達のなかには集中力が続かなくなってきた。大人達もJ・V・Aとの練習調整とそれに関わる時間が多すぎて悲鳴を上げ始めた。と同時に人間関係も難しい。「私やりすぎかしら…」と高田さんも自分と他の大人達の温度差で悩み出していた。「う〜ん。まあ、私は高田さんに任せてるからもう少し頑張ってみよう…」

と励ましながら、一方メンバーにはあまり気を張らないで…、都合の悪いときは休みながら…と肩の力を落とすように話した。

そんな時に河北新報の記者が取材にやってくる、全員緊張感がうまれた。いいタイミングだった。

記者は練習風景をカメラに収めながら、聞き取り取材をしていた。内容については高田さんが話していたし、龍からも話していたので把握していた。

「どつれ、一度合わせてやってみようか…」

龍はみんなの気分を変えるつもりと記者へのサービスもあった。それに一度合わせることでこれからの進め方が分かるかなと急に提案してみたのだ。

「まだちょっと早いかも…」高田さんは心配そうではあったが、龍は「気分転換にはなるよ」とみんなにスタンバイするように声をかけた。

みんな緊張しながらも一つの曲になる喜びで目の輝きが変わった。

イントロのギターのアルペジオから始まって、ベースギター、ドラム、キーボード、そしてボーカルへと曲はたどたどしくだが進んでいった。最後の方は大人も混じっての大合唱となり、今までのうっぴんが一気に飛んでいった様子であった。

記者は、子どもたちにも「また頑張ってるね」と声をかけながら、龍にはピースマークをしながら「良かったです。新聞に掲載される時に市民センターの方にご連絡しますので…」と満足そうに帰って行った。

一週間くらいして、河北新報の記者から市民センターの事務室に連絡があった。

事務の佐藤さんが体育館に走ってきた。

「明日の夕刊に載るって今電話ありましたから」

ハアハアいいながら、顔は満面の笑顔であった。

「はい。」

練習をしていた大人も子ども全員拍手となった。

次の日の夕刊の二面目には五段組で大きく取り上げられた。「地域の大人たちが子どもたちに音楽を指導しながらコミュニケーションをはかっている。バンドを結成して八名の子どもたちが夏祭りを目指して練習に頑張っている」と二段組のカラー写真とともに掲載された。

カラー写真には子ども達と指導するJ・V・Aのメンバーたちの様子が載っていた。

龍はその日の四時頃に近くのコンビニに車を走らせた。

そして、残っていた五部の夕刊を全部買い込んだ。

第二十章 夏祭りの準備

龍は娘の真保に「今度の夏祭りだけど、出演してみないかい？」と声をかけた。

真保は、去年から新しいバンドに参加しているようだった。十二人編成の若者たちに受けそうなレゲエバンドで、真保はそのメンバーの中でテナーサックスを吹いていた。

「う〜ん、今度の練習の時にリーダーにきいてみるから」

「多分、いいと言いつと思うよ。お父さんの話は少ししたことがあるから…」

「そっか〜、じゃ頼むよ。夏祭りも少しマンネリしてきたから… 今年は何者と呼べるかいいと思ってね」

「う〜ん、わかった〜」

そのレゲエバンドは去年のジャズフェスに出ていて、龍は聞きに行った。なかなか楽しげな雰囲気のあるバンドで、レゲエのリズムが心地よいものだった。勾当台公園の会場は満員で若者達が盛り上がっていた。

「このバンドを夏祭りにひっぱってこれたら…きつとウケるよな〜」と龍は去年から狙っていたのだ。

真保のバンドも出るとなると夏祭りは大いに盛り上がること間違いない。それに親子で同じステージを作るのはそうはないチャンスだと龍はそっちの方が嬉しく思った。

次の週に「出てもいいって…」と真保に聞いたときは、これは楽しいことになるよ…龍はまたやる気を起こすようになった。

自分の二つのバンド練習と子どもバンドの練習、連合町内会との夏祭りの打合せで相当疲れていた龍にとっては、真保たちの出演は大きなカンフル剤になった。

「今度、打合せがあるから、あんたも出席して」と来週の土曜の夜にバンドの出演者たちとの合同打合せを市民センターで予定していた。

そして、打合せ当日。携帯に「遅くなりそうだから、先に進めてて〜」と真保から連絡が入った。

バンドの打合せは、機材の準備、出演順番、演奏時間、人数、リハーサルスケジュールなど綿密なものだった。龍は毎回同じ事を繰り返してきたが、今回は参加メンバーも最多で質的にも最高のものになったと思った。

会議が始まって十五分過ぎた頃にドアが開いて、真保と背の高い長髪の恰好のいい若者が頭を下げながら入ってきた。

「遅くなりました。ご迷惑をおかけしてすいませんでした」と真保は丁寧に謝った。若者も申し訳なさそうに頭を下げた。

「いや、よろしく願います」と他の参加者からも声がかかった。

今回から初めて出演する人達も数名いた。会議の初めのうちは少し緊張気味だったが、そこは音楽仲間、すぐにうち解けて音楽談義になった。

一時間ほどで打合せは終わった。これでなんとか音楽祭のころの準備は整った。

「今日はすいませんでした。当日はよろしくお願いします…」若者は帰り際にまた深々と頭を下げた。

「いやあ、忙しいところありがとうね。よろしく」龍も頭を下げた。

真保はその若者と先に帰って行った。

「恰好いい人だね。」

「うーん、今時の若者っていう感じだけど、挨拶はきちうとしてるから安心だよ」

以前からの音楽友達も真保たちのバンドを歓迎してくれたので、龍は安心した。

しかし、まさかこの若者が将来深い関係になるとは…。その時は夢にも思わなかった。

さてJーV Aは、最後の調整に入っていた。子供バンドの指導ということもあって、大変な思いをしながらの練習ではあった。龍もかなりストレスが溜まって疲れていた。

「吉田さん、そのドラムは難しいこと考えないで、簡単でいいですよー!」

「もうあまり時間がないから、特別な叩き方はしない方がいいよー!」

「なんか、バラバラだなく、もう一回くやりましょー!」

龍のイライラは絶頂に達していた。

J・V・Aの練習が終わると、夜にはBack Numberの練習がまっていた。…。龍はガタガタに疲れていた。それでもBack Numberは、新鮮さがあって練習が終わる頃にはスカッとした。大きな声で歌うのは気持ち良かったし、イライラする要因がなかったからだ。

一方、子どもバンドは、パートごとの練習は終わって、全員で合わせてイケそうなところまで進んでいた。それにしてもあのタ刊の影響は大きかった。あれ以来、みんな責任を感じ始めたのか目の色が変わったし、共通のプレッシャーがひとつにまとまるきっかけを与えたようだ。

子どもバンドは夏祭りに前倒しで出ようということになった。秋の文化祭までの練習は長すぎて、子ども達も大人達もだらけてしまいそうだったこともある。市民センター側も大喜びだった。

「J・V・A、Back Number、子供バンド…もうやっぴいまじっ迫り着いた。」

第二十二章 夏祭りⅠ

その日は朝から今にも雨が落ちてきそうな曇り空だった。

龍が会場に行ったときにはテントの設営や櫓の設営はすでに終わっていた。

「おはようございます～。降りそうですね～」

といいながら龍は市民センターの事務室に入っていた。

「おはようございます。曇りのち雨の天気予報みたい」とパソコンの画面を見ながらみんな気をもんでいた。

「おはようございます」と吉田会長もやってきた。

「大したことないですよ。今日の雨は…」とあまり気にしていない様子だった。

「雨天決行ですから」と言いながら会場に去っていった。

「吉田さん、降ったらバンツェじっしますわ。」

「テントでもしますか。」

「テントの中ですか、音楽だけ体育館という訳にはいきませんか？」

「うーん、会場がしらけるから…」

「それも分かるけど、雨の心配しながらでは、バンドの人達は可哀想だから…」

龍は、いい「コンディション」の中でバンドのみんなに演奏をして欲しかった。機材のこともある。雨の中の音楽祭は避けたかった。

PAの加納さんもやってきた。

「降りそつだね。雨の中ですか」と不安そうな顔をした。

「うーん、少し待って。体育館でやれないか交渉しているから…」

「できれば、それが一番やりやすいかな…」

バンドの連中も手伝いに集まってきた。

「こうで、やるんですか？」

結局、煮え切らない判断のまま

「とりあえずテント張ります」と町内会は少し動き出した。

龍は、仕方ないかと諦めて、「加納さん、準備してくれますか」と声をかけた。

バンドのみんなもボチボチと動き出した。

備品係の人も「椅子はここでもいいですか」と並べ始めた。

大体ステージも出来上がったところだ。ザーとやつぱり降り出した。

みんなはテントの中に入って、空を見上げている。龍は椅子に座ったまま動く気がしないでいた。

「ありゃ、やつぱり降ってきたね」とそこに吉田会長がやってきた。

「やつぱり、体育館ですかね」とポツリ。

龍にはその言葉はまるで人ごとのように聞こえた。

「あなたも当事者なんだよ。バンドマンの一人としてもう少し親身になって考えろ！」

…きれた…。

「ぶぎけるな〜！」と同時にパイプ椅子がひとつつ飛んだ。

龍がけっ飛ばしたのだ。

会場が一瞬止まった。雨の中、椅子に座り込んでいた龍の方を一齐にみた。

「判断が遅すぎるんだよ」

「あれだけ言ったのに、これから移動するといったら大変でしょ」

「まるで他人事みたいな言い方じゃないですか！」

「……」

誰も口を開かない。

「加納さん、悪いけど、体育館に移動するから…。」

「みんなで、運ぼう…」

「そうだよ、その方が安心だよ」高田夫婦が後押しした。

「今からやれば、間に合うさ」甘谷さんも動き出した。

バンドのみんなは動き出した。

「いづですよね」と龍は吉田会長の顔をみた。

「……………」。「顔でうなずいた。

一体、今日の夏祭りはどうなってしまうのだろうか。

第二十二章 夏祭り2

誰も昼飯も食べずに、黙々と体育館に全ての機材を運んだ。椅子を並べ直し、ステージにアンプ、マイク、ドラムセットをあげて、PA以外の準備が整ったのは一時を回っていた。

PAの加納さんはまたセッティングのやり直しが始まった。

「ごめんね。昼飯食って少し休んでから」「みんなも手伝うから…」と龍は謝ったが、加納さんの奥さんの方が「もう、やってられないわ」とブツブツと言いはじめていた。

加納さんは奥さんを怒鳴なりつけた「うるせー黙ってやれ!」「こども喧嘩っばくなっていた。

外は相変わらず雨が降ったり止んだりを続けていた。

龍は失敗したなと思っではいたが、とにかく今はやるしかないとい心を強くしていた。外のメイン会場と体育館の音楽会場が別れてしまうので、夏祭りにやってくる人は二分されるかもしれない。メイン会場では音楽以外のイベントが雨の模様をみながら進めていく予定だった。それと雨の中のテントで飲み物や食べ物を作って売る人たちも大変である。全体のことを考えると…吉田会長もなかなか難しい判断ではあった。

ただ、龍はバンド出演者をなんとか雨から守りたかった。いい気持ちで演奏をしてほしい、そして聞いて

ほしい。ただその一念だったのだ。

スタートの三時まで、リハーサルが行われた。予定より大幅にずれて時間はあまりなかった。

「平井さん、体育館は音が反響して難しいね」と加納さんは屋内の音作りに苦労していた。そういえば加納さんのPAで体育館を使うのは初めてだった。

「少し、音量下げ気味の方がいいかもね。」

「スピーカーも外より減らすよ」

「そっだね。返し用に回してもらって…」

龍は会場の椅子に腰を掛けたまま加納さんとのコミュニケーションをとっていた。リハーサルは甘谷さんや高田夫婦が仕切ってくれていたので安心していた。

龍は自分が出演するJ・V・AとBack Numberのリハーサルを終えると、控室の会議室で遅い昼食をして部屋の片隅においてある机の上に横になって目を閉じていた。

頭の中は色々な思いがグルグルと回っていた。誰も話しかけてくることもなく、しばらく休んでいた。本番前のエネルギーを蓄えていた。

龍はムクツと起きると体育館に向かった。子どもバンドのリハーサルが始まったところだった。子ども達は着替えをしてみんな可愛くなっていた。

子どもバンドの方は高田さんとJ・V・Aのみんながまとめていた。一度通して演奏してからスタンバイした。調子はいいいたいだ。

三時が過ぎた。

吉田実行委員長がステージに上がり、短い開会の言葉で夏祭りがいよいよスタートした。吉田会長もさすがに元氣のない声であった。

ふたたびステージに上がってきた子供バンド。緊張はますます高まって顔を赤くしていた。いよいよ始める。今までの練習の集大成だ。晴れ舞台の時がきた。

「どうれ、いつも通りやってみっか、元氣だしていくよ」とボーカルの五年生の女の子の頭を撫でながら龍はステージにあがってみんなに声をかけた。

会場には、一般の人はもちろん、子ども達の親兄弟、友達、市民センターの所長、事務員さん、そして河北新報社の記者もまた取材にきてくれて、ほぼ満員の状態だった。

高田さんはドラムの子供の横にしゃがんで心配そうにスタンバイしていた。

ケンケンケンケン…ドラムのカウントで「チェリー」は始まった。子ども達を指導して二ヶ月。見事に子供バンドは練習通りの演奏を披露した。子ども達の才能はすごい。初心者のドラム、ギター、ベースギター、五

年生と六年生の二人のボーカル、そしてキーボードの二人の八人はやり通したのだ。

四分弱の演奏のために費やした練習の時間、心の葛藤、技術の習得…等々これまでの思いを子ども達も出し切ってくればいいなと思った。そしていい思い出の一頁にしてもえれば大人達も満足してくれると思う。

ここまで導いた高田さんの力は大きいし、J・V・Aのメンバーもここまで本当によくやってくれた。龍の思いつきで始まってしまった子供バンド。演奏が終わると会場は「ウォーッ！」という声とともに大きな拍手が体育館に鳴り響いた。

「ご苦労様〜。」握手をし合っていた。大きく万歳をしている者もいた。抱き合っている子ども達もいた。ジャンプしている子どももいた。みんなそれぞれが体中で喜びを表現していた。

高田さんは目を真っ赤にしていたし、J・V・Aのメンバーも感動していた。みんな本当にいい顔をしていた。子ども達は緊張からようやく解放されていつもの子どもらしい笑顔に戻っていた。

良かった。やって良かったと龍はまず大きなステップをひとつ越えた。

その後は中学生バンド、高校生バンドが若いパワーを爆発させた。いい顔をしていた。

いよいよ四時頃から大人達のバンドが始まってトップバッターにJ・V・A、Back Numberの登場となるスケジュールになっていた。

第二十三章 夏祭り3

龍は今度はプレイヤーとしてステージの上に立っていた。

龍にとってはブルーアトラス時代から何度となく上がったステージだ。慣れてはいるもののやはりこの緊張感は毎回変わらなかった。ステージにあがったらもう逃げられない、腹をくくって精一杯パフォーマンスを続けるしかないのだ。そして、この何とも言えないドキドキした瞬間と何が起こるか分からないステージ上での筋書きのないドラマが楽しかった。

今までも、頭が真っ白になって演奏ができなくなったこと、風で楽譜立てがバタバタ倒れて焦ったこと、アンブから煙が出てきた雨の中のライブ、そんなことが沢山ありながらステージ上でメンバーの顔を見合わせて微笑み合う瞬間の気持ちよさ、みんなが乗っているときの満足感、ライブが終わったときの達成感と一体感。これがあるからやめられないという人もいる。たしかに病みつきになってしまう魅力がある。

今回のJ・V・Aは結成してから半年で仕上げられたバンドだ。ボーカル以外は去年の夏祭りに出演したThe Kings of Kingsというバンドから引き続いたメンバーだったので出来たのだ。経験そのものは3年目になっていた。ただ演奏する曲はがらりと変わったのと、途中子どもバンドの指導もあったりで練習時間が取れずそれぞれ大変な思いをしてのステージだった。

おまけに夏祭り準備中の龍の椅子蹴り事件もあってJ・V・Aのチームワークはバラバラになりかけていた。これから30分の演奏は一体どうなるのか…。最悪の状態を迎えたのはたしかだった。

みんなの顔が緊張で引きつっていた。

「会場にヒロシさんはおりますか？」と龍が問いかけると何人か手を挙げた。

「はい、それではヒロシさんにおくります。」 会場に笑い声がでた。

「ワンツースリーフォー」龍はカウントをとった。

この曲をトップにもってきたのが功を奏した。ノリのいいイントロのエレキの音がメンバーのモヤモヤした気持ちを吹き飛ばしたようだった。織田さんが提案したサザンの「そんなヒロシにだまされて」は会場も盛り上がった。メンバーも徐々に落ち着きを取り戻していい顔になっていった。 龍は「これでいける！」と手応えを感じた。

続けて「涙の太陽」これも古い歌だが夏にぴったりのエレキサウンド、そして懐かしいピンキーとキラーズの「恋の季節」。この3曲で会場はすっかりJ・V・Aに引き込まれたようだった。

龍は今回の選曲には自信があつた。古くさいけど馴染みのある曲が絶対ウケると思った。

そしてスローバラードで高橋真梨子の「ジョニーへの伝言」、青筋の「ハナミズキ」の2曲を挟んで、高橋真梨子の「桃色吐息」、ラストにアニメ「タッチ」と軽快なリズム感のある曲へと繋いでいった。

演奏曲順にも流れがあつて考え通りのステージになった。

演奏の未熟さは仕方がなかった。ドラムは途中で止まってしまつは、リズムは遅すぎたり早すぎたり…。

キーボードの音は外れるは…で色々とトубツたがとにかく最後までノリに乗って会場は大喝采だった。

龍と織田さんがそのままステージに残りそこに石川さんが加わった。

ステージはBack Numberに引き継がれた。3人は椅子に腰を掛けて横二列に並んだ。龍はエレキギターをエレアコに持ち替えて淡々とバンドの紹介をしながらスタンバイをしていた。

まだ結成して間もないBack Number今回は三曲の演奏にとどめた。JーV Aの延長線上というイメージもあったが龍がメインボーカルを担当するという点ではこれも初めてのことだった。龍はバックコーラスでハモっていたので歌うことには抵抗はなかったが自分の歌声がどんなものか、正直分からなかった。ただ、ギターの先生に「いい声してるね」といわれたことだけが、密かに自信を大きくはしていた。

「戦争を知らない子どもたち」、「夏休み」、「少年時代」の三曲を選んだ。「戦争を」と「夏休み」の二曲は石川さんの歌も引つ張り出すことを意識した。「少年時代」はゆかちゃんのキーボードで応援してもらった。

いすに座つての演奏といふこと、JーV Aでステージ慣れをしたこと、曲調もあつて落ち着きたいイメージになった。龍はこれからBack Numberに期待をもたずにはいられなかった。

プレイヤーとしての龍の出番は終わった。それからの龍は並べられたパイプ椅子に深く座り込んで次から次へと繰り広げられる馴染みのバンドたちのパフォーマンスをボーッと眺めていた。起きているのか寝て

いるのか視線もどこにおいているのか…。朝からの疲れがどーっと龍の集中力を奪っていた。聞き覚えのある音楽だけが龍の脳裏を通り過ぎていた。

今回初参加の男性デュオグループ、カントリーバンド、元ブルーアトラスの仲間のベンチャーズ、ビートルズと出演者たちのジャンヌの多さがこの音楽祭の魅力だった。おそらく聞く方も飽きない、飽きさせないメンバー達の演奏であつた。

いよいよ音楽祭も最後を迎えた。

館内がザワザワとざわめいてきた。

それほど広くもないステージに12人の若者が肩をぶつけるくらいにして勢揃いした。娘が一緒にやっているレゲエバンドの面々達だ。人数の多さだけでも迫力があつた。ドラム、ギター、打楽器、管楽器、コーラス、メインボーカルと演奏が始まるやいなや会場は今までにない迫力ある演奏に引き込まれていった。

袖の方から若いお兄ちゃんが腰をクネクネさせながらレゲエの音楽に合わせて踊りだした。そのパフォーマンスに会場は大笑い。それが演奏といかにもマッチしてまるで邪魔にならない。計算されていたかのようというのか…。真保の話ではバンドのリーダーの友達なのだそうです。

30分の演奏は拍手拍手で終わった。

そして、龍はステージの中央に立ち挨拶をした。

そして演奏参加者全員をステージにあげ、子ども達が歌ったスピッツの「チェリー」の大合唱を提案した。

ドラムに高田さんが座った。ベースギターもサイドギターもキーボードも自然におのおのが弾きだした。龍は途中で涙が出そうで仕方がなかった。J・V・A、ベンチャーズの甘谷さん、ビートルズの坂口さん、初参加のデュオの二人、カントリー、レゲエの若者達、そして子ども達もみんな本当に素晴らしい顔をして歌い、演奏をしていた。

みんなのこの満足そうな顔が龍の疲れを一掃した。

「ありがとうー！また来年あいましょうー！」龍の最後の言葉で夏祭り「コンサート」を締めた。